

第1部 『赤ヘル1975』の世界

ミスター赤ヘル

山本浩二

スペシャル・
インタビュー

広島東洋カープの初優勝を劇的に描いた『赤ヘル1975』。

その年4番打者として活躍し、その後、

監督としてもカープを優勝に導いた球界のレジェンド、

山本浩二氏へのインタビューが実現した！

著者・重松清氏ご自身が、

あの年のカープについて、

熱い広島ファンへの思いについて、

そして今年絶好調のカープについて聞いた。

聞き手／

重松清



山本浩二 (やまもと・こうじ)

1946年広島市生まれ。1968年のドラフト1位指名で広島東洋カーブに入団。1975年には4番打者として初のリーグ優勝に大きく貢献した。以後もチームの主砲としてプロ野球生活18年で本塁打王4回、打点王3回など数々のタイトルを獲得した。背番号[8]は広島東洋カーブの永久欠番となっている。1989年～1993年と2001年～2005年の2度、カーブの監督に就任し、1991年には監督としてもチームを優勝に導いた。2013年の第3回WBCでは日本代表監督を務める。現在は野球解説者として活躍する傍ら、2014年に日本プロ野球名球会理事長に就任し、東日本大震災被災者との交流やアジアにおける野球振興活動に尽力している。

赤ヘル軍団の始まり

山本 この『赤ヘル1975』は、ひとに薦められて去年、買ったんですよ。面白かったです。

重松 ありがとうございます。一九七五年の野球少年にとっては、山本浩二さんにお目にかかれるというのは本当にうれしいことです。僕らは、教室の掃除をするときにほうきを持って、「四番、センター、山本浩二」ってやっていました。

プロ野球選手は、昔のことを克明に憶えてらっしゃる方もいれば、もう済んだことは忘れて先に向かう方もいらっしやいます。浩二さんはどちらですか？

山本 どちらかと言えば忘れていくほうですね。

重松 そういう意味では七五年の初優勝は比較的記憶に残っていらっしやいますか？

山本 そうですね。それに関する取材や講演も多いし、やっぱり初優勝っていうのは起点ですよ。そこから自分も成長してきているし、けっこう憶えていますね。

重松 今日は一九七五年の新聞スクラップを持ってきました。

山本 ああ（感嘆）、これ重松さんがスクラップしたんですか？

重松 中国新聞にいる知り合いが作って送ってくれまして。浩二さんが写っているところをピックアップしてきたんですが……これいかがですか？

山本 細いねえ！ これ、シーズン後半ですか？

重松 いえ、五月十三日なので、まだ二位の時期ですね。後年、浩二さんはホームランバッターの代名詞となりますけれども、この当時はどちらかという俊足巧打……。

山本 中距離砲ですよ。野手の間を抜くようなバッティングが得意でした。

重松 タイプで言ったら松井稼頭まっいかず史お選手（東北楽天ゴールデンイーグルス）のようなイメージがありました。

山本 そうですね。ホームランを打つ選手じゃなかったですよ。ただ、バッティングって積み重ねでしょ。打つと打球が伸びることがある、それを数多くやっていると身体

が覚えて徐々に徐々にホームランが飛ぶようになってくる。

重松 これは広島市民球場が決して広くなかったことも影響していましたか？

山本 いやあ、それはどうでしょう。自分のスタイルは大学時代からそんな感じでしたから。ホームランがこの年で三十本くらいかな。それから二年後ぐらいが四十本以上。積み重ねで数が多くなっただけですかね。

重松 このスクラップブックを見ていると、本当に節目節目で印象的なホームランが出ていますが、いちばん僕たちにとって思い出深いのは、（ページをめくって）これかな……。オールスター第一戦の！

山本 これが、それこそ起点ですよ。

重松 衣笠^{きぬがせちお}祥雄選手との二打席連続アベックホームラン！ このときに全国区になった感じですか。

山本 ですね。次の日から「赤ヘル旋風」と言われて。特に僕とキヌ（衣笠祥雄）が打ったのが大きかったですよね。これは自分でも気づかないうちに、いちばん大きな自信になりましたね。この年のオールスターで、初めて三番を打たせてもらったんです。うしろが王^{おう}（貞治^{さだはる}）さんでしょ。セ・リーグのクリーンナップというのは……。

重松 すごいことですね。この試合、浩二さんは一発狙っていたんですか？

山本 う〜ん、そこまではなかったと思いますね。ただ、オールスターでピッチャーはだいたい力で押ししてくるから、どうして

もストレート系を狙います。それがたまたま二打席連続になったんです。

重松 だったらよけいにびっくりするやらうれしいやら……。

山本 そうです、そうです。本当に、初めてオールスターで活躍した。後半はこれを起点に一気に乗っていきましたからね。

重松 僕たちも、「これ、ほんまに優勝するんじゃないか」という気持ちになったのは、このあたりからどんどん……。

山本 僕らは、まだ。

重松 選手は「まだ」ですか？

山本 僕と同級生がカープファンクラブの会長だったんですけど、五月に沖縄遠征があったじゃないですか。シェーン（リッチー・シェインブラム）が二本ホームラン打



▲中国新聞のスクラップブックを、なつかしそうに手に取る山本氏。

って、連勝したんですよ。

重松 これで二年ぶりの首位。

山本 このときに広島に帰って、その同級生と食事をするよ、彼が「優勝するんじゃないか」と言うんですよ。で、僕の答えが、「まさか」でしたから。毎年五月まで調子よくなって……。

重松 いつも鯉のぼりのころまではいんですよね（笑）。

山本 六月に入ってまた首位に立った。七月、オールスターで打った。でもそれでも「まだ」。

重松 それでも「まだ」、ですか。

山本 八月に上位争いしているあたりで初めて「ひよっとしたらひよっとするかもわからない」とみんなが思い始めた。そうする

とプレッシャーですよ。これは半端じゃなかった。夏の広島は暑いでしょう。だからくたくたになるんです、心身ともに。

重松 みんな点滴を打っていたと聞いたことがあります。

山本 打っていました。相手が練習しているときに点滴打って、そのまましんどいなと思いつながら試合に出る。

優勝する前の年まではどちらかと言えば、自分の成績さえよければ、と思っただんですね。ライバルの衣笠がいたり、水谷（実雄）、三村（敏之）とか、同じ年代の選手がいる中で……。

重松 「俺が、俺が」と。

山本 そう。「打つなよ」と心の中で思っていたかもしれない。でも八月に「ひよっ

としたら優勝するかも」とみんなが思い始めるのと、「なんとか打ってくれ」という気持ちになっただけです。それほど優勝のプレッシャーは大きくて、それでだんだんだんひとつになっただけです。

重松 軍団になっただけです。

試合に乱入する熱いファン

重松 この記事ではグラウンドに浩二さんがいて、ファンが乱入して紙吹雪をまいてます（笑）。広島ならではですよ。

山本 サヨナラの時じゃないんですよ？

重松 七回に逆転……だから、これ試合中ですよ、まだ。試合中にこんなことやっていたんです。



この続きは

IN☆POCKET 2016年8月号で!